

それを以下に記して、蕪雜な評を終えたい。

「南朝禁衛武官組織系統考」〔『史学月刊』二〇〇五年二期〕

「南朝的石頭城防与領石頭戍事」〔『浙江學刊』二〇〇五年二期〕

（二〇〇四年十一月、中華書局、北京、上下二冊、一〇一三頁）

ピーター・C・パーデュー著

### 中国の西征——清の中央ユーラシア征服——

小沼 孝博

滿洲人を皇帝・支配者層とする清は、一八世紀中葉までに、明の支配の外にあった中央ユーラシアの諸地域を断続的な軍事行動により獲得した。この時形成された清の支配領域が現代中国の領土的骨格となっていることは、ここであらためて指摘することではないだろう。では、この一大事業を可能にした原動力とは果たして何だったのだろうか。かかる難問に、精緻な史料批判にもとづく多角的な分析をもって挑み、清という「帝国」の実像を問い直さんとするのが、本書『中国の西征——清の中央ユーラシア征服——』である。

著者であるパーデュー氏は、ハーバード大学で故フレックチャー教授に師事し、現在はマサチューセッツ工科大学にて研究に従事する。一九八七年に公刊された前著は明清時代の湖南における経済政策・農業開発を扱ったものだったが、その後は清代西北史研究に精力的に取り組んできた。本書はそれらの成果を一冊の学術書としてまとめ直したも

のであり、七〇〇頁を越える、まさに大著である。

著者は前言において、本書のタイトルに関し、次のように述べている。本書で論じる中央ユーラシア征服とは現代中国の「国民国家」によつて是認されており、表題には「中国 China」を用いた。しかし、その当事者たちの多くは非漢族であるので、副題は「中国の征服 Chinese Conquest」ではなく、「清の征服 Qing Conquest」とした、と。本書全体を通じて、著者は清の征服に対する「ナシヨナリズム」に裏打ちされた評価に批判的な眼差しを向けているが、一方でその評価の生成過程を探ることこそ、「帝国」の遺産が「国民国家」にいかに関承されたのかを解明する鍵であると見なし、本文中で考察の射程に収めている。

それでは、先ず本文の概要を紹介する。

#### 序

清の中央ユーラシア征服に考察の力点を置き、一七〇一―八世紀のユーラシアに鼎立した三つの帝国——清・ジュンニガル・ロシア——の対立から、ジュンニガルの滅亡と清・ロシアによる大陸分断までの過程を論じ、という本書の目的が述べられる。また近年、特にアメリカにおいて、いわゆる「ワールド・ヒストリー」の観点からの清朝史研究が盛んになりつつあるが、この動向をふまえ、清の

中央ユーラシア征服を世界史上における画期として位置づけようとする意欲を示す。

#### 第一部 中央ユーラシア国家の形成

第一部・第二部は、清のユーラシア征服の過程を通史的に論じる。第一章では、中央ユーラシアの自然・社会環境を紹介する。特徴的なのは、中央ユーラシアに生きる人間の意識・行動を規定する因子として、厳しい環境条件よりも、人為による政治的・文化的作用を重視する視座である。この視座は、各章の論証においても一貫しており、本書の基調をなす。第二章では、先ず、攻勢から守勢へと転換していった明のモンゴル政策を論じる。次に、モスクワ大公国（ロシア）の形成に、遊牧社会に起源を持つ制度・慣行が果たした役割を強調し、さらにロシアによるシベリア進出の過程を述べる。第三章では、ジュンニガルと満洲（清）が国家形成期にいかなる努力を試みたのかを検討。ジュンニガルに関しては、バートルニホンタイジによる都市建設を高く評価する。満洲に関しては、政治面における皇帝（ハン）の独裁権力強化と中国的な統治機構の導入を、単なる中国文明の受容（漢化）ではなく、国家拡大のための軍事的・行政的要求によるものと理解する。一方、その国家拡大を可能にする経済基盤に関しては、満洲が恒常的な食糧不足に悩んでおり、「大清国」成立後ですら分

裂の危機にあつた可能性を示唆する。<sup>(3)</sup>

## 第二部 権力をめぐる争い

第四章では、清の視点からジュンニガル・ロシアとの拮抗を描写。ガルダンのハルハ侵入とハルハの内モンゴルへの逃避に際し、康熙帝は一六九〇年七月末に突如出征を宣言する（第一次親征<sup>(4)</sup>）。康熙帝自身は八月末に酷暑と臣下の説得により帰京したが、物資の欠乏とその運搬の困難さを実感し、経済発展の必要性を認識したという。また、ネルチンスク条約において清が得た最大の成果は、ジュンニガルからロシアという潜在的な同盟者を奪つたこととする。第五章は、康熙帝の三度の親征（一六九六～九七年）を扱う。各次親征の性格の相違や物資供給に関する問題点を明確に指摘し、且つ『御製親征朔漠方略』（以下『朔略』）に巧妙に織り込まれている、「天意」によつて約束された清の勝利、という論理の矛盾を暴く。第六章では、ジュンニガルの外国人捕虜を利用した経済開発を概説し、また一八世紀前半に中央ユーラシアを横断したトゥリシエン・ジョンニベル・ウンコフスキーの旅日記を比較し、清とジュンニガルの対立に対する多様な視点を提供。さらに、チベットをめぐる清とジュンニガルの覇権争いと清の勝利の経緯を説明する。第七章では、清とジュンニガルの和平期（一七三四～五四年）における両者間の貿易（北京での朝

貢貿易、肅州・ハミでの辺疆貿易、チベットでの熬茶貿易）の実態を明らかにする。研究の少ない分野だけに貴重な考察である。ついで、ジュンニガルの内訌、清によるジュンニガル・東トルキスタンの征服、さらにトルグート部の帰順までを論じ、モンゴル遊牧民が「巨大な農業帝国」に併呑され、「世界史上における大事件が終了した」（二九九頁）と結論する。

## 第三部 帝国の経済基盤

第三部では、中央ユーラシア征服を達成するための経済基盤がいかにして構築されたのかを検討。第八章では、年羹堯の「青海善後事宜十三条」、及び甘肅の地方行政組織の変遷を分析し、西北辺疆における清朝の行政プランを考察する。特に後者では、明から継承した軍政組織（衛所）が民政組織（州・県・庁）へと改組されていく過程を概観し、この延長線上に新疆建省を位置付ける。第九章では、一八世紀後半に概ね成功していた新疆の各屯田が、その後次第に衰退し、新たに移住してきた自作農民の手に移っていくことを指摘する。反面、屯田の没落とは、軍↓民という方向性を持つ辺疆における経済発展策の成功を意味するという。第十章では、甘肅における清政府の経済支援策を詳述する。厳しい環境の甘肅では常に十分な収穫を得られなかったが、政府直轄の屯田は、政府の投資・支援により

高い収穫高を保った。また、甘肅では新疆征服期の一七五四～五九年に干ばつが続いたが、官倉からの穀物の放出、商人の誘致による流通の確保、他省からの穀物搬入などの支援策が講じられ、騒乱発生を防いだ。このような文・武官が民と兵を区別なく支え合う体制は、徐々に失われていくという。第十一章では、甘肅・新疆東部における貨幣流通と穀物価格を題材にして清の経済政策を論じ、またジュンガル・カザフとの交易における清の狙いが、実利よりも安全保障面における間接的な利益にあったことを強調する。

#### 第四部 辺疆の確定

第四部は、清が支配の正当性を主張するために実施した文化事業を扱う。第十二章では、皇帝の親征・巡幸を分析し、そこに包含されている支配者の狙いと複合的な文化要素を析出する。ついで、清の軍事行動を記念した勅建碑文より、皇帝から「帝国」の構成員に向けられたメッセージを読み解く。各言語間の相違に言及し、中国（儒教）文化と遊牧文化との間の「ちようつがい」としての満洲語の役割にも注目する。さらに、国家規模で推進された地図作製の背景に、一つの視座の下に多様な文化・土地を包み込み、空間支配の正当性を確定しようとする清側の意図を看取する。第十三章では、清代における歴史書の編纂を取り上げ

る。特に、先行研究を消化した上での『朔略』に対する史料批判は見事。我々の編纂史料の扱い方が、いかに粗雑であるかを実感させられる。

#### 第五部 遺産と影響

第五部では、「帝国」の遺産が近・現代中国の国家ヴィジョンに及ぼしている影響を明らかにする。第十四章では、清代～現代の中国の歴史家たちによる歴史の叙述方法に注目。そこには、政権や歴史観の違いに関わりなく、征服活動による清の領域拡大を、征服ではなく、「運命付けられていた『統一』」とする共通見解が窺える。実はこの「異なる勝利を『天意』によって決定されていた自然の成り行き」と断じて作り上げた「神話」が厳然と存在しているという。つまり、現代中国において乾隆帝は領土・民族の「統一」を体現した為政者として称揚されているが、これ自体、乾隆帝が仕組んだトリックに陥った結果だというのである。「乾隆帝は、自分がかくも巧妙にこの神話が現代の中国人の心に浸透していることを知り、笑みを浮かべることであらう」（五〇九～五一〇頁）という指摘には、背筋に寒さすら覚えた。第十五章で著者は、「清とジュンガル」の対立を競合による国家建設の過程として分析してきた前章までの議論にもとづき、その競合の中で「両者が、経済・

軍事的物資を動員し、行政組織を作り上げ、征服と支配のイデオロギーを「発展」させた、すなわち「戦争が国家を育てた」（五一―八頁）という見解を提示する。その上で、清とジュンニガルの「帝国建設 empire building」とヨーロッパにおける「国家建設 state building」のあり方を比較し、

両者に根本的な差異はないことを説く。第十六章では、清の衰退要因を考察。その主な要因として、清の自己革新の動機であった辺疆への軍事行動・領域拡大が終了したこと、西北で培った軍事的・外交的経験が東南の新たな挑戦者（国内反乱勢力・ヨーロッパ勢力）に通用しなかつたこと、中央権力と均衡を保ってきた在地有力者が地方分権化の傾向を見せ始めたこと、そして一六世紀以降進展してきた商業化が彼らの中央への忠誠心を徐々に減退させたことを挙げる。

巻末の付録には、論証の關鍵となる文書史料の英訳、甘肅の収獲高・氣候に関するデータなどを収める。多彩な写真・図版の数々も本書の魅力の一つである。

本書で扱われているテーマは、政治・経済・文化・言語・環境など多方面にわたり、またジュンニガル・ロシア・オスマン朝の国家建設、北米大陸の西部開拓、イギリスのインド支配などが随所で引き合いに出され、幅広い比較の

視点を提供してくれる。広範な視野から問題の把握を試みようとする著者の研究姿勢には感服するばかりであり、序で示された本書の目的は達成されたといえるであろう。以下においては、今後の研究の展望を交えつつ、本書の特徴と著者の意義をあらためて述べてみたい。

まず、清代西北史研究に対する独自の研究手法を指摘したい。従来の研究は政治史・制度史が中心であったが、ここでは「藩部」という概念が象徴するように、中国内地と対置される形で対象地域の枠組みが設定されてきた。ところが、本書では、清という「帝国」の多様さは強調するが、「藩部」の語は一度も登場せず、問題設定の段階で「帝国」を分断し、議論の幅を限定するような行為はなされていない。また、主題である「清の中央ユーラシア征服を可能にしたものは何か」という問題に対し、先行研究ではその答えを漠然と清の政治力・軍事力に求める嫌があるが、本書では、「食料は有力な武器」（一七七頁）という表現が端的に示すように、清の経済政策を重視する。特に第三部では、この問題関心にもとづいた事例研究が示される。以下、第十章で展開されている清当局による甘肅の地域経済への介入に関する議論（三八七―三九二頁）を具体的に紹介しよう。

甘肅各地の穀物価格を比較した場合、通常は各地の穀物

価格は一樣でないが、飢饉發生の年は著しい相関關係を示すようになる。この相関關係は、体系的で、関連性のある省内の交易關係のパターンが存在することを示唆している。すなわち、飢饉の年は当局が官倉貯蓄を放出し、商人の協力を得て穀物を必要としている地域への運搬を促し、遠隔地交易を決済する銀両によって各地の市場が結びつけられるので、境界を越えた価格の均一化が起こるのである。一方、平常時においては、大半の日用品交易は各地方市場に限定され、地方に滞留する銅錢の使用が支配的となるため、穀物価格の市場間での相関關係は失われる、というのである。著者は、「西北は、南中国より中央との結びつきは弱い、国家への依存度は強い」と指摘する。そして、そこで実施される上述のような地道な經濟政策——「見えざる手 invisible hand」ならぬ、「見える手 visible hand」——は、資源供給の制約を克服し、中央ユーラシア征服を可能とする原動力を生み出していった、と論理展開されていく。手堅い事例研究にもとづく説得力のある主張といえよう。

次に史料の扱い方に関して。本書の叙述は主に清の編纂史料に依っている。あらためて述べるまでもないが、編纂史料は王朝側に都合のよいように記事の取捨・改変がなされている。このバイアスを取り除くための最も手っ取り早い方法は、原文書や相手側が記した史料、或いは第三者が

記した史料との対照であり、本書でもこれらの方法は随所で効果的に用いられている。では、対照できる他の史料が残されていない場合はどうするのか。ここで著者の本領が発揮される。例えば著者は、『朔略』中の編纂者の按語に注目し、ガルダン戦争当時のガルダンに対する清の見解と戦争終了後（『朔略』編纂時）のそれとの間にある差異を見出す。『朔略』巻三、康熙二十五年一〇月戊午条は、クレイン＝ベルチルの会盟の実施について記している。この会盟は、深刻化したハルハ左右翼の対立を調停するために康熙帝がダライ＝ラマと共同で開いた講話會議であった。ところが、本条に付された按語では、あたかも康熙帝が、「ハルハがガルダンの侵入によって滅ぼされる前に、ハルハを説得して和合させる」（一四七頁）ことを目的として会盟を開いたかの如く述べられているのである。著者の指摘によれば、一六八〇年代の北方における康熙帝の最大の関心はロシア勢力の排除であり（一三八頁）、少なくともクレイン＝ベルチルの会盟以前の段階において康熙帝はガルダンをハルハや清の大きな脅威と考えていなかった（一四七頁）。すなわち、会盟後に敢行された親征の戦果を称揚するため、編集段階で、ガルダンが「清にとつて一貫して御し難い敵であった」（一四七頁）という見解が付加されているのである。著者はこれを清による「歴史の書き換え」と見なす

が、一方でそれを清側のバイアスを排除しつつ編纂史料を読むための一つの手がかりとし、事実への接近を試みようとしているのである。

当然ながら、このような「歴史の書き換え」は歴史研究の大きな障害となる。したがって、我々は研究の精度を高めるために、常に原史料の渉猟に貪欲でなければいけない。だが、その一方で怠ってはならないのは、新たな事実が判明するたびに、編纂史料の内容を再検討するという作業である。著者が指摘するように、王朝の歴史書編纂による「歴史の書き換え」とは、中央ユーラシア征服の最終的な解釈・評価の決定、及び支配の正当性の確定を企図したものであり、「帝国」の統合を目指した政治的・経済的な取り組みに比肩する役割を果たしたといえる。よって、「何が方略から省略されているのか、どのようにして原史料の取捨選択がなされたのか」（四八一頁）を究明することは、清の国家戦略を浮き彫りにすること、ひいては清という「帝国」の実像にさらに迫ることになるといえる。

また本書は、碑文・地図を本格的に活用した研究としても評価される。特に、地図に対する著者の視角は、製図の正確さを問うものではなく、地図上に作製者の空間認識や政治的意図がどのように反映しているのかを探ろうとするものであり、この視角は既に他の研究者の研究関心を喚起

し、新たな研究を生み出すに至っている。

他方、やや残念に思われるのは、その重要性を強調するものの、最後まで十分な議論をおこなわない問題が見られることである。例えば、戦時に物資供給を担う商人の存在である。著者は、彼らを「戦鬪で戦う兵士と同等の軍功がある」（一八三頁）と評価し、その貢献度の高さを重ねて強調する。しかし、彼らがどのような存在であり、いかなる活動を展開していたのか、という考察はほとんど見られない。著者の主張を、より確固としたものにする論点であるだけに、是非とも盛り込んで欲しかった。また、第一部・第二部の通史部分を除き、被支配者となった各民族集団、及び彼らの居住地域に対する論及が極めて少ない。確かに、本書の目的は「清の中央ユーラシア征服を可能にした原動力は何か」という点にあり、被支配者側の視点の欠如に対するむやみな批判は差し控えなければいけない。しかし、「清の課題とは、あらゆる帝国が持っていたものと同じく、いかにして一つの権威の下に極めて多様な人間集団をつなぎ止めておくか、であった」（三四五頁）と認識するからには、王朝が各人間集団に対しどのような方法で権威を誇示していたのか、それはどの範囲、どのレベルまで達していたのか、という点を組上に載せてもよかったと思う。

最後に、些細な点ではあるが、青海ホシユートのグシハンを「Gusi Khan」と表記する箇所と「Gusri Khan」とする箇所があり、統一されていない。後者は、ベテック氏の著作における「Gusri Khan」という表記に倣ったものであろうが、書き分けに法則性はなく、特に断りもないため読者に混乱を生じさせかねない。満洲語のローマ字転写で、*ss*と*s*を区別しないことも気になった。また、トルグート部の帰順事務を担当したイレトゥ（伊勒圖）を「ホブドの満洲大臣」（二九五頁）とするが、正しくは伊犁將軍。さらに、「イリのベクは世襲ではない」（三五三頁）とあるが、イリのハーキムベク職はトルファン郡王エミンホージャの第一子の家系が世襲していた<sup>10)</sup>。

以上の点は、もちろん本書の価値を損なうようなものではない。膨大な史料を読みこなし、緻密な分析によって清の中央ユーラシア征服を克明に描いた本書は、最も信頼に足るモノグラフとして不動の地位を獲得するであろう。そして、本書を起点とした新たな研究が、今後陸続と世に送り出されるに違いない。

## 註

- (1) Peter C. Perdue, *Exhausting the Earth: State and Peasant in Hunan, 1500-1850*. Cambridge, Mass.: Harvard University

Press, 1987.

- (2) その成果の「*Qing Formation in World-Historical Time*」 Lynn A. Struve (Ed.), *The Qing Formation in World-Historical Time*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2004. を挙げておく。パーデュー氏も、本書第二部第四章・第五章のもととなる康熙帝のモンゴル親征に関する論考を寄せている。

- (3) 対明戦争の本質に安定した経済基盤（主に穀物）の確保という側面があったことは、石橋崇雄『大清帝国』（講談社、二〇〇〇）八七～八八頁でも指摘されている。今後は、各時代の政治状況をふまえた、実証的な検討が期待される。

- (4) 他の研究では、この一六九〇年の出征は康熙帝の親征に数えず、一六九六～九七年に三度実施されたものを第一次～第三次の親征とすることが多い。

- (5) 清朝皇帝の巡幸に関して、岸本美緒「清朝皇帝の江南巡幸」（『史友』三七、二〇〇五）一六～一七頁では、「支配下の全領域をくまなく巡る、或いは領土の外縁に沿って巡幸するという、いわば面を確定するような形で行われるものではなく、むしろ、帝国を形成するいくつかの部分の中心を往還し、そこに自らの姿を現すことによって、複数の世界の統合を図るものであった」と明快に指摘するが、パーデュー氏の考察もこれと共通する視



点からなされている。

- (6) 以前評者は、拙稿「清朝によるオーロト各オトク支配の展開——モンゴル諸部に対する「旗」支配の導入——」(『東洋学報』八五—四、二〇〇四)、「横組」(一—二六頁)において、満洲語文書を用い、清がジュンガル征服後にオイラト人に対し旗制支配の実施を試みたが、結局失敗に終わり、さらなる反乱を招いたことを指摘した。この「失策」に関する記事は、『平定準噶爾方略』から完全に除外されており、「歴史の書き換え」の実例といえる。

- (7) 第十二章に成果が反映している Peter C. Perdue. "Boundaries, Maps, and Movement: Chinese, Russian, and Mongolian Empires in Early Modern Central Eurasia." *The International History Review* 10, no. 2 (1998): 263-186. 1 触発された研究として James A. Millward, "Coming onto the Map": "Western Regions" Geography and Cartographic Nomenclature in the Making of Chinese in Xinjiang." *Late Imperial China* 20, no. 2 (1999): 61-98; 孫喆『康雍乾時期輿図繪制与疆域形成研究』(北京: 中国人民大学出版社、二〇〇三)がある。

- (8) この問題を考察した研究に、香坂昌紀「清代前期のジュンガル政策とその経済効果」(『東北学院大学論集

——歴史学・地理学——』三七、二〇〇四、一—八一頁)がある。

- (9) Luciano Petech. *China and Tibet in the Early XIIIth Century: History of the Establishment of Chinese Protectorate in Tibet*. Leiden: E. J. Brill, 1950.

- (10) 佐口透『新疆民族史研究』(吉川弘文館、一九八六)二八三頁、参照。

Peter C. Perdue, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2005, xx + 725p.